

4 「論証型」レポート

- 「論証型」レポートとは——提示されたテーマの中で論点を絞り込み、論拠を提示して自分の見解を示す。一般的なレポート。
- 内容——論点にかかわる情報のまとめと、論点にかんする見解および見解を支える根拠。
- 目的——論点にかかわる現状や背景、論争を把握していることを、論理的・批判的思考力とともに示す。
- 課題の例——「〇〇について考察しなさい。」「〇〇についてあなたの考えを示しなさい。」
- 文字数——2,000～4,000 字程度。
- 手順・構成

(1)課題を理解する

- レポート課題の指示をよく読み、どのような形式で何を書くことが求められているのか理解する。
 - ・ 提出期限、文字数、ページ設定、記載事項、表紙の有無など。
 - ・ 内容についての指示や注意事項もよく読んでそれにしなす。



(2)資料を集め、目を通す

- テーマの概要を把握する。
 - ・ インターネットや新書、ブックレット、入門書などでテーマの概要を知る。
 - ・ 自分がレポートで扱うトピックのおおまかな見当をつける。
- 図書館などで関連資料を入手する。
 - ・ 図書館 OPAC や CiNii などを用いて、関係する文献や論文を見つけ、入手する。
 - 検索する際のキーワードに工夫をする。トピックやテーマをそのまま入力するだけでなく、他の語と組み合わせたり、関係のありそうな周辺の用語で検索してみたりする。
 - 同じテーマについて異なる立場から論じているものを見つけるよう意識する。
- 読んでノートをとる。
 - ・ 入手した文献に目を通し、レポートの材料となりそうな情報をノートに書き出す。
 - 論点として使えそうな情報や、論点を支えるのに使えそうなデータ、具体例などをメモしておく。
 - 引用・参照されている文献で役に立ちそうなものは入手する。



(3)情報を整理し、アウトラインを作成する

- 論点をさらに絞り込む。
 - ・ 書き込みやノートを見返して、考えを整理する。
 - ・ 問いを立て、論点とそれを支える根拠を考える。 【発想・着想編】1～8
- レポートの構成を考える。
 - ・ 「(4) 書く」の構成を参考に、どの部分にどの情報をどの資料をもとにして入れ込むのか、構成（アウトライン）を考える。 【構成編】2 レポートの基本スタイル、8～9 アウトライン[構想]を立てる



(4)書く

I. はじめに（序論）（10%～15%くらい） 【構成編】3 序論の組み立て方

- ・ 問題の背景に簡単にふれる。
- ・ 論点を絞り込み、問題提起をする。
- ・ 主張と結論を示す。
- ・ 方法と全体の見取り図（どういう順序で議論を展開するのか）を提示する。

II. 本論（全体の 70～80%くらい） 【構成編】4 本論の組み立て方

パターン1 背景→問題→解決策

背景・現状(本論 1)（全体の 20%くらい）

- ・ 取り上げるテーマの背景と現状について説明する。
- ・ データや例などを示す。

(3)問題提起(本論 2)（全体の 20～25%くらい）

- ・ 背景・現状をふまえて、そこに見出される問題を指摘する。
- ・ データや例などを示す。

(4)解決策(本論 3)（全体の 20～25%くらい）

- ・ 現状と問題提起をふまえ、解決策を示す。
- ・ データや例などを示す。

パターン2 論点1→論点2→論点3

本論1（全体の 20～25%くらい）

- ・ 第一の論点の要点を示す。
- ・ それに説明を加える→データや例を示す。

本論2（全体の 20～25%くらい）

- ・ 第一の論点の要点を示す。
- ・ それに説明を加える→データや例を示す。

本論3（全体の 20～25%くらい）

- ・ 第一の論点の要点を示す。
- ・ それに説明を加える→データや例を示す。

III. おわりに（結論）（全体の 10～15%）

- ・ 本論の論点を確認する。
- ・ 序論での問題提起に答え、結論を確認する。
- ・ 今後の課題などがあれば示す。



(5)チェックする

- 原稿を読み直し、誤字・脱字がないか、また文体や文章表現、構成などは適切か確認する。 レポート・ライティング 10 最終原稿チェックリスト

4 論証型レポート (例)

「歩きスマホ」の危険性と防止策に関する一考察

1. はじめに

近年、スマートフォンを歩きながら使用する「歩きスマホ」が社会問題となっている。メールやチャット、SNS の確認や地図の閲覧など、スマートフォンの便利さに慣れてくると、つい無意識のうちに歩きスマホをしてしまいそうになる。しかし、画面に没頭すればするほど、視界が狭くなり、周囲への注意力も散漫になるため、歩きスマホは事故やトラブルの原因となる。駅のホームで階段を踏み外して大怪我につながるなどの危険性があるほか、他人にぶつかって怪我をさせてしまう可能性もある。実際に、携帯電話やスマートフォンを歩きながら使用し、駅のホームから転落する事故も発生しており、ニュースや新聞などでも歩きスマホの危険性が取り上げられている。

そこまで危険を冒して「ながら歩き」をしなくてはならないほど、重要かつ緊急の用件があるのだろうか。おそらく、緊急な用件による使用というより、「すぐにメールの返信がしたい」といったユーザの心理が問題なのであろう。実際、歩きスマホでしていることの約 6 割は「メール」である (※1)。スマートフォンユーザが半数を超え (※2)、「歩きスマホ」による事故が増加している現状から問題点を分析し、ユーザ・非ユーザの両者が安心して生活できる社会を実現するために、どのような手立てを講じるべきかを考察する。

【構成編】3 序論の組み立て方

2. 「歩きスマホ」の現状と危険性

スマートフォンや携帯電話を操作しながら歩き、事故に遭い救急搬送された人数 (東京都) は 2013 年の調査で 36 人に上る (※3)。2010 年の 23 人と比較すると 3 年間で 1.5 倍の増加をみせている。2013 年 10 月、東京都板橋区で、歩きながら携帯電話を見ていた 40 代男性がそのまま踏切内に進入し、電車にはねられ死亡した。同年 5 月には JR 四ツ谷駅のホームで、携帯電話を操作しながら歩いていた 10 歳の男児が線路に転落し、重傷を負う事故も起こっており、歩きスマホによる事故や怪我は全世代にわたり今後も増加することが十分予想される。

こうした現状から、NTT ドコモが啓発のために行ったシミュレーション「全員歩きスマホ in 渋谷スクランブル交差点」(※4) によれば、衝突件数 446 件、転倒件数 103 件となり、横断成功者は全体の 1/3 強であった。歩行者の視界は、通常歩行時に比べて約 1/20 になり、歩く速度は通常時の 7 割程度にしかならないとされている。つまり、歩きスマホをしている当人は非常に視野の狭い状態で歩行していることになり、通常では予見できる危険性を回避できる割合が極端に低くなるということが言える。

このレポートでは、本論は「現状」(2. 「歩きスマホ」の現状と危険性) → 「問題点」(3. 「歩きスマホ」の問題点) → 「解決策」(4. マナー啓発の取り組み) という流れで構成されている。【構成編】4 本論の組み立て方

資料を使って具体的なデータ (数値等) を示し、論点を根拠づける。

3. 「歩きスマホ」の問題点

こうした歩きスマホの危険性を認識しながらも、それでもやめられない背景に「スマホ依存」の問題がある。これは、若年層を中心に、いつもスマートフォンが手放せず他のことが疎かになってしまふ、スマートフォンを取り上げられると禁断症状に近いものが表れてしまふ、といった状況を指す。

実際に大学内を見渡してみても、友人との会話や食事中でもスマートフォンを手にしていたり、画面を気にしていたりする光景をよく目にする。多くの学生が一度に学生食堂に移動する昼休みの際にも、歩きスマホをしている学生が多く、ぶつかりそうになったこともある。重要な連絡が来るわけではないのにスマートフォンがなければ不安でたまらなくなるとしたら、それはもう依存であるといっても過言ではないだろう。本来、依存性は自分自身では気づかないことも少なくないため、抜け出すのは容易でない。

こうした深刻なスマホ依存は、日本だけの問題ではない。アメリカや台湾、韓国でもスマホ依存が社会問題化し、各国政府が使用規制に乗り出している。実際、アメリカのアイダホ州レックスバーグ市では、横断中の歩きスマホに罰金 50 ドル、2 度目以降は罰金 150 ドルという法律を制定しており、台湾でも罰金制導入を検討している。

具体例を示す。

4. マナー啓発の取り組み

日本では、現時点において歩きスマホに対する規制はなく、個々のユーザのマナーの問題でもあるため対策は難しいとされているが、交通機関や行政、携帯電話業界は啓発に向けた取り組みを開始している。NTT ドコモは、2012 年 2 月より新聞、雑誌、ラジオでの啓発広告を展開しており、歩きスマホの危険性を注意喚起するマナー広告を掲出している。年間の乗降者数が国内でもっとも多い JR 新宿駅東口改札外の出口付近の階段に掲出された広告には、階段面に「危険です、歩きスマホ。」と大きく表示されている。また、階段左右の側面には歩きスマホの危険な様子を描き、同時に「この広告には気づかなくても、みんなの冷たい視線には気づいてほしい。」といった皮肉めいたメッセージを表示している。

また、NTT ドコモは 2013 年 12 月、歩きスマホを自動検知して画面に警告を出す機能（「歩きスマホ防止機能」）をスマートフォン向けアプリ「あんしんモード」に追加した（※5）。スマートフォンの傾きや加速度、カメラを利用した動体検出で「歩きスマホ」を判定し警告を出す。無料で利用できるため、こうしたアプリをダウンロードすることを勧めているが、そもそも歩きスマホが迷惑行為であるという自覚がない人々は、ダウンロードすらしないことが予想される。本気で取り組む姿勢を見せるのであれば、防止機能が備わっているスマートフォンしか販売できない仕組みを整えるべきであろう。現在、NTT ドコモが率先した形で啓発活動を行っているが、こうした取り組みは多くの通信各社が協力して行うべきものである。「学割」や「家族割」など多様な割引制度を打ち出し、携帯電話およびスマートフォンユーザを低年齢の子どもから高齢者にまで広げて販売する以上、利便性だけではなく安心・安全を第一に保障することこそが通信各社の責務であると考えられる。

5. おわりに

スマートフォン保有率は年々増加傾向にあり、15 歳から 19 歳の保有率は約 9 割にも達する（※2）ため、スマートフォンをもつ以上、ポスターや CM などの啓発に加えて学校でもマナーを教えることが必要である。NTT ドコモでは 2004 年から「ケータイ安全教室」を開催し、全国の小・中学校や高等学校などで携帯電話を使う際のマナーやトラブルへの対処方法を教えている。

『歩きスマホは「動くバリアー（障壁）」というより「歩く凶器」だ』（※6）とも言われている。自分が怪我をしたり、相手に怪我をさせたりしてからは手遅れである。罰則化を推進する立場の主張も理解できるが、まずは歩きスマホの危険性を一人ひとりが自覚し、公共の場におけるマナーを改めて考え直すことが先決である。

重大な事故を引き起こす可能性を孕むスマートフォンは、電源を切れば両手に収まるただの薄い板である。むろんそこには膨大な情報がストックでき、世界中の情報を一瞬にして得ることもできる。しかし、それでもやはりスマートフォンはただの道具にすぎない。日常の、二度と戻ってはこない今という貴重な時間を、単なる道具に支配され消費してしまっているというおかしな現実を目を向けるべきである。同時に、この道具に心を奪われている一瞬の隙に、尊い自分自身のみならず、他人の命まで奪いかねない危険性を常に孕んでいるという現実を認識すべきである。単なる道具に人生を左右されることなく、あくまで自分たちが使う主体側であることを忘れずに使用していく姿勢を一人ひとりがもつことが最優先課題であると考えられる。

※参考・引用文献一覧

- (1) MMD 研究所（2013）『『歩きスマホ』でしていること』調査結果
- (2) 株式会社博報堂 DY ホールディングス（2014）「全国の高校生～69 歳の 7,852 人を対象にしたスマートフォン保有率調査」
<http://www.hakuhodo.co.jp/archives/newsrelease/15354>（2014 年 6 月 27 日閲覧）
- (3) 東京消防庁ホームページ <http://www.tfd.metro.tokyo.jp/lfe/topics/nichijou.html>（2014 年 6 月 2 日閲覧）
- (4) 小塚一宏（2014）監修、NTTdocomo 「全員歩きスマホ in 渋谷スクランブル交差点」
- (5) NTTdocomo ホームページ https://www.nttdocomo.co.jp/info/news_release（2014 年 6 月 2 日閲覧）
- (6) 『毎日新聞』（2013 年 6 月 26 日付朝刊）社説「歩きスマホ 画面より大切なもの」

(3,229 字)

指示がない場合には文末注や脚注、参考文献一覧なども文字数に含める。